

津波への認識

地震、津波、原発事故の複合災害となった東日本大震災では、情報や報道のあり方がさまざまな局面で問われていた。事前事後の備えや対応はどうか。被災と情報の専門家が現時点での課題を論じる。(立会人、伊藤和史学芸部長、写真・武市公孝)

立会人 被災後に集落が孤立して、いまだに被害が把握できない例もあります。

中村 被災情報の集約は、なかなかうまくいきません。被災直後に可能なのは、ヘリコプターで上空から把握する方法でしょう。しかし、それでは何人亡くなったかなど、細かい情報は分からない。

福田 国レベルでは、被害の大きい中心部からの情報ほど集まらないことが多い。周辺部から先に情報が届きますが、それをもとに初動体制を作ると間違えます。官邸や災害対策本部は情報を待つだけではダメなんです。消防収集の段階から自衛隊や消防の力を活用しないといけません。

立会人 東京電力福島第一原発の周辺住民に、情報はどう届いていたのでしょうか。

福田 避難を阻害する要因に「平常化の偏見」があります。津波が来ても自分は大丈夫だろう、という思い込みです。「経験の逆機能」というものもある。前の津波は地震後1時間経たず、まだ時間があると考え、偏った経験や知識で避難が遅れるのです。今回もその傾向が見られました。津波の経験がある地域でも、きめ細かい教育が必要です。

立会人 それがあれば被害をもっと抑えられた、と。

中村 津波が、岩手県宮古市などの高さ10mの防潮堤を越える恐れがあることも前から言われていました。そのことを強調していれば、もっと被害が小さかった可能性はあります。ハザードマップと現実の浸水域も違いすぎました。想定される東海地震や南海地震と、その津波では、根本から被害規模を見直さなければなりません。

政府はリスクコミュニケーションを見直せ

福田 充氏 日本大法学部教授

中村 現地には情報を集約するためのオフサイトセンター(緊急事態応急対応拠点施設)がありました。被災で機能しませんでした。福田 福島県いわき市を調査し渡辺敬夫市長に聞いたのですが、自主避難すべき原発から30km圏内に市の一部が含まれるのに市長にも国から連絡がなく、その情報をテレビ報道で先に知ったそうです。市役所にヨウ素剤の問い合わせが多いため、急ぎよ市民に配布していました。事故の影響は想定外だったようです。

原発情報の混乱

立会人 国や東電の発表も混乱しました。

福田 平時には、原子力安全・保安院が首相官邸と東京電力を媒介しています。事故発生後もこのシステムを使うとしたら、情報共有がうまくいきませんでした。東電、官邸、保安院が、もっと早い段階で合同の対策本部を設置する必要がありました。

中村 東電は原発を推進しているし、監督する保安院も推進派の色彩がある。そのため、とりあえず大丈夫という情報ばかりが出てきます。ようやく、お目付け役の原子力安全委員会(原子力安全規制への信頼性向上を使命とし、首相への報告権限も持つ独立機関)が表に出てきました。

福田 その通り。政府の情報管理を監視する委員会のような機関を市民やメディアが支えないと、信用できる情報は出てきません。

立会人 事態への専門家の解釈も「安全」から「危険」まで幅があります。

福田 政府の発表も、例えば農産物や水に含まれる放射性物質が基準値を超えると出荷停止や摂取制限をするが、ちょっと食べてもすぐに健康被害は出ないという、いわばダブルスタンダード。人々に



なかむら・いさお 65年生まれ。東大大学院博士課程単位取得退学。松山大学助教授を経て現職。共著に「災害情報入門」など。

メディアは平易に科学解説する人材の育成を

中村 功氏 東洋大社会学部教授

困惑が広がっています。マスメディアとしては、パニックが起きるような報道に責任をとらないといけません。確信がないのに、不安をあおるのは慎むべきだと思います。

通信・広報の役割

立会人 通信・広報手段ごとの特性はわかっていますか。

中村 被災地沿岸部の携帯電話の基地局は停電などでほぼ全滅でした。他方、ネットや携帯メールは非停電地域では使えました。電話のように混み合いませんでしたから。

福田 ただ阪神大震災の時に新しいメディアだったネットがどう使われたかを調査したら、被災地外からの100さんは無事ですか?という問い合わせが7割、被災地か

情報などソフト充実

目指す防災思想こそ

聞いて一言

これほどの大被害を前に、誰もが今後の道筋を考えあぐねているのではないかと。その点、防災はハードだけでは無理、と中村氏が強調するのが印象的だった。高さに限界がある堤防に頼らず、より

安価なソフトの充実を目指す防災思想。ソフトの代表が情報。避難の準備、その情報の共有、訓練と、改めて基本動作の大切さを考える。

一方、新情報ツールとしての礼賛が目立つツイッター。福田氏によれば、ツイッターが活躍したのは、停電もなく、携帯も通じる被災地外での出来事だった。(伊藤)



ふくだ・みつる 69年生まれ。東大大学院博士課程単位取得退学。著書に「リスク・コミュニケーションとメディア」など。